

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

小泉智貴 ドレスデザイナー / 美術作家

TOMO KOIZUMI / Dress designer / Studio artist



CREATOR INTERVIEW ^{No} 158

小泉智貴 TOMO KOIZUMI

1988年 千葉県生まれ。14歳より独学でドレスづくりを始める。

2011年、千葉大学在学中に自身の名を冠するブランドTOMO KOIZUMIを立ち上げ、日本を中心に歌手や広告の衣装デザインを手がける。2019年、初となるファッションショーをニューヨークで開催。同年、毎日ファッション大賞選考委員特別賞受賞、BoF500選出。2020年、LVMHプライズ優勝者の1人に選ばれる。2021年、東京オリンピック開会式にて国歌斉唱の衣装を担当。同年、毎日ファッション大賞を受賞。2023年、イタリアのブランドDolce&Gabbanaの支援によりミラノ・ファッション・ウィークにてコレクション発表。

ドレスデザイナーとして活動する傍ら、2022年からは美術作家としてもコンテンポラリーアートの製作を開始。2023年12月に初となる個展「Tomo Koizumi」を開催し、活躍の幅を広げ続けている。

No

158

小泉 智貴 ドレスデザイナー / 美術作家
TOMO KOIZUMI / Dress designer / Studio artist

クリエイターインタビュー

『六本木を舞台に、境界を越えた多面的な作品展示を』

調和が取れていて美しいけれど、印象的なクリエイションが目標

published_2024.07.31 / photo_ yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

14歳から独学で服づくりを始め、SNSをきっかけに世界的スタイリストに才能を見いだされ、初のファッションショーをニューヨークで開催。レディー・ガガ、サム・スミス、ビョークをはじめとした顧客から支持されるブランド「TOMO KOIZUMI」のデザイナー、小泉智貴さん。ラッフルをふんだんにあしらったカラフルでファンタジックなドレスは、ファッション業界に驚きをもって迎えられ、いまやアートとしても注目されています。小泉さんがドレスを通して追求する表現について、お話を伺いました。

「これ」というテーマは次々と出てくるものではない。

TOMO KOIZUMI のデザインにラッフルを採用するようになったのは、8年くらい前になります。10代の頃からファッションデザイナーになりたいと思って独学で服をつくっていました。ファッションの学校で専門的な技術を学んだわけではなく、大学時代は美術を専攻したので、自分の持っている技術でそのときにできるものをつくる、というやり方でしたね。20代の頃は衣装デザイナーの仕事をしていく中で徐々に技術が上がってきて、以前から憧れていたオートクチュールのドレスをつくりたいと思うようになりました。そのときにデザインのディテールとして、ラッフルを使ってみたのが最初になります。



TOMO KOIZUMI

独学で服づくりをしていた小泉さんが、千葉大学在学中の2011年に立ち上げたブランド。ラッフルに覆われた立体的なフォルムで、鮮やかな色使いのドレスが特徴的。

©TOMO KOIZUMI

扱っている素材は日本製のポリエステルオーガンジーです。入手できる素材の中で一番しっくりきたのがこれで、素材の魅力をどうしたら最大限に引き出せるか考えた結果、このデザインが生まれました。だから日本に住んでいる自分の環境、使える素材、憧れているイメージ、それらがうまく合致したことでできあがったデザインともいえます。

2019年には、ニューヨークで初めてファッションショーをやらせてもらいました。きっかけはイギリスに住んでいるケイティ・グランドというスタイリストが、Instagram で僕のドレスを見つけてくれたのが始まりです。ラッフルのデザインが目にとめてもらうきっかけでもあったので、その後も「じゃあ次!」と切り替えて全然違うものをつくろうとは思わなかった。もちろん、そのときどきのトレンドに合わせて、それっぽいものをつくることはできなくはないし、いろんな葛藤がありました。でも僕は、自分が大切につくりあげたディティールを育てたかった。そして、それをオーセンティックなものに磨きあげていきたい気持ちが強くて、今もずっとラッフルにこだわり続けています。そもそも、自分にとって「これ」というテーマはそう簡単に出てくるものではありません。だから試行錯誤を経て見つけた大切なテーマを成熟させて、ライフワークにしていきたいんです。



ケイティ・グランド (Katie Grand)

イギリスのスタイリスト、ファッション・ディレクター、ファッション・ジャーナリスト。90年代にイギリス発のファッション&カルチャー誌『Dazed & Confused』を立ち上げる。ファッション誌『POP』、『LOVE』、『Perfect』の創始者としても知られ、ファッションの世界でもっとも影響力を持つスタイリストの1人。

©TOMO KOIZUMI



初めてのファッションショー

Instagramを通じてケイティ・グランドに才能を見いだされ、連絡を取り合った末にショーをすることが決定。マーク・ジェイコブス、メイクアップアーティストのパット・マクグラス、ヘアスタイリストのガイド・パラオなど豪華メンバーの全面サポートによって、2019年2月にニューヨークファッションウィークでTOMO KOIZUMI初のファッションショーが開催された。

©TOMO KOIZUMI

理想とする美を内包しながら、どれだけ人を引きつけられるか。

影響を受けたデザイナーはたくさんいますが、一番はやっぱりジョン・ガリアーノ。今はメゾン マルジェラでクリエイティブ・ディレクターをしています。中学生のときに見たガリアーノのデザインに衝撃を受けて、ファッションデザイナーを志しました。僕がファッションの世界に憧れた 2000 年代半ばから後半と比べ、今はファッション業界を取り巻く状況はかなり違うと思っています。僕の場合も SNS が注目してもらえるきっかけの1つではありましたが、最近はどうだかバズらせるかに重きが置かれすぎていて、そのための飛び道具みたいなものがどんどん出てきて、表面的な表現が増えてしまっているのは残念ですね。多感な時期に受けた衝撃や感動の記憶は、いつまで経っても色褪せないもの。あのとき心を奪われた瞬間を、自分がつくるものを通して今、再現できたらいいなと思っています。

ジョン・ガリアーノ (John Galliano)

イギリスのファッションデザイナー。ジバンシィやクリスチャン・ディオールなど世界的ブランドのデザイナーに抜擢され、「ファッション界の革命児」と称される。現在はメゾン マルジェラのクリエイティブ・ディレクターを務める。波乱万丈な人生も注目され、2024年9月にはドキュメンタリー映画『ジョン・ガリアーノ 世界一愚かな天才デザイナー』が公開される。

ファッションデザイナーとして現在は東京をベースにしながら、海外に出向いたりしてコレクションを発表しています。どれだけ人を引きつけられるかが勝負だと思うので、自分のオリジナリティがひと目で伝わるようには意識していますね。ただしそれは見た目が派手だとか、単にノイズをつくりたいという意味ではありません。調和が取れていて美しいけれど、印象的なクリエイションが目標なので、なるべくそこに近づけるよう努力をしています。ただ変わっているとか、驚かせたいというのではなく、自分が理想とする美を内包しているものをつくっていきたいです。

ものづくりにおいて、日本らしさはそこまで意識していません。リファレンスとしてそういったものを扱うことはありますが、アウトプットするときはあからさまな感じにはしたくない。意外性も大切なので、日本らしさみたいなものは説明されたらわかるくらいのさじ加減にしたいですね。とはいえ、日本には偉大な先輩デザイナーがいて、彼らがつくりあげてくれた功績や歴史があります。そのおかげで、僕も海外でジャパニーズデザイナーとして歓迎されたりもします。伝統文化の側面だけでなく、ユニークさという点でも「日本人デザイナー」というカテゴリーで評価してもらえるのはとてもありがたいです。そのうえであえて意識せず、自分なりの尺度でものづくりをしているから差異が生まれるのだろうし、世界的な規模で見ても独自のクリエイションができるのだと思います。



published_2024.07.31 / photo_ yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

アイデアを持つことは簡単。難しいのは行動に移すこと。

たぶん、みんなアイデア自体はいろいろ持っていると思うんです。大切なのは「自分はこれをやりたい」と、自信を持って実行できるかどうか。行動に移すのがもっとも難しいことでもあるので、それがオリジナリティの判断基準の1つになっていると思っています。だから「何をやっているか」だけでなく、「どれだけやっているか」も大事。リスクを取らずに大きな成果は得られません。「これは実現させるに値することだ」と自分の美的感覚を信じて、ひたすらつくっていくしかない。1つのドレスをつくるにはいくつもの試行錯誤があつて、途中でやり直すことだってあるし、それなりの時間がかかります。でも、「この一着に時間をかける価値がある」と、まずは自分自身が信じないとつくりあげることはできないと僕は思います。

さまざまな思いを込めて時間をかけて完成させたものを、1つのトレンドとして片付けられたくない、という気持ちもあります。半年ほどで消費されて、次のシーズンに出てくるものを期待されるサイクルの繰り返しだと、時代に流されるだけだし、自分もそれに加担することになる。すべてのブランドが変わるべきとは思いませんが、ファッション業界の硬直的なシステムに反発したかったし、僕のようなデザイナーがいてもいいんじゃないかな、と。1つのオルタナティブな存在としてのステートメントのようなものですね。

機会に対して NO と言うのは、弱さではなく強さ。

僕は衣装デザイナーとして、半分はファッションで、もう半分はエンターテインメントの世界にいる意識を強く持っています。それもあって、大量につくって大量に消費して、売れ残ったものは燃やすというやり方には無駄が多いと常々感じていました。合理的なタイプなので、どこを重視したいか自分に問いかけたとき、最優先すべきはやはり、いいものをつくるクリエイションを極めていくことだったんですね。そのうえでなるべく無駄がないやり方を突き詰めると、量産はしないとか、コレクションは年 1 回だけとか、そういう流れになってくる。無理なく続けるためには、業界の常識や通例にこだわらないほうがいいと思って、今のような制作スタイルになりました。

1 年前にパリへ行ったとき、縁あってガリアーノと実際に会うことができ、1 時間くらい話をしました。いろんな質問をしたのですが、デザイナーとして続けていくうえでのアドバイスとして、「機会に対して NO と言うのは弱いからではなく、強いから言えるのだ。その思いを大切にしたいほうがいい」という言葉をいただきました。今までやってきたことが間違っていなかったと励まされましたね。たしかにすべてに YES と言っていたら時間もないし、それによって逆に失う機会も増えてくる。なので選別していくことが、ますます大切になってきたと感じています。



小泉智貴 ドレスデザイナー / 美術作家
TOMO KOIZUMI / Dress designer / Studio artist

published_2024.07.31 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

ファッションとアートを行き来して見えてくること。

僕のドレスは、服以上のものであるという自負を持っています。実際に僕がつくったドレスの1つはニューヨークにあるメトロポリタン美術館の永久所蔵になっているのですが、そういう経緯からも残していくべき作品の存在を意識して、常にそれを目指していきたいです。そもそも「ファッションとアートにはどれだけの違いがあるのか」と考えたときに、実はそれほど差異がないんじゃないかと思ったんです。これまでの創作の延長で、アートの世界に挑戦していけるんじゃないか、という可能性を感じました。そして、その挑戦を形にしたのが昨年末の個展『Tomo Koizumi』でした。



『Tomo Koizumi』展

2023年12月9日から2024年2月10日にかけて、東京・天王洲「YUKIKOMIZUTANI」で開催された自身初となるアート作品の個展。「ファッションとアートの境界線」をテーマに、ギャラリーをクローゼットに見立て、フリル生地を手でペイントした作品などを展示。ドレスにも、絵画にも、彫刻にも捉えられる作品が話題となった。

©TOMO KOIZUMI

展示したのはドレスと呼ぶにはちょっと風変わりな作品で、普段使っている素材に、自分が学生のときに専攻した絵画の技法を組み合わせたりしました。個展では、ファッションとアートの境界をなくすことをテーマにしていたのですが、それぞれのカテゴリーを意識しているのはむしろ自分自身だった、という現実には直面しましたね。でも、そこに気付けたからこそ、もっと新しいことができるんじゃないかとも感じて。個展をつくりあげた時点ではベストなものができたと感じていたけれど、いろんな方からフィードバックをもらって、冷静に振り返ってみると「次はこうしたい」という欲も生まれています。今だったらもっと違うことができるかもしれない、と思えること自体がうれしくもあり、さらに成長していくための踏み台になっていくのだと感じています。

ファッションのコレクションも毎回ベストを尽くしていますが、多くの人に関係していることから、つくり手である自分からは半ば独立した存在のような感覚があります。一方、美術作家として作品を発表するのは、自身の成長過程も含めて見せていく感覚に近い。つくるものと自分自身が一体化した、パーソナルなものだと実感しています。今後もアートでやってみたいことはたくさんありますし、ファッションショーのように一期一会の瞬間をつくりだすことも大好きなので、続けていきたい。ファッションとアートの分野を行き来しながら、お互いの活動にいい影響を与えて、そのときでできること、やりたい表現方法で発表していくのが理想です。

商業利用ではない才能の使い方がもっと増えてほしい。

日本のファッション業界で活躍しようと思うと、つくったものを売ってマネタイズするのが基本ですね。ですが、ビジネスのスタイルが1つしかないのはつまらないし、商用ではない才能の使い方がもっとあっていいと思っています。マネタイズやコスト回収に必ずしも直結していなくても、経験問わず才能のある人を抜擢したり、「つくっているものもいいから何かやらせてみよう」という考えがもっと広がればいいなと思います。僕が注目してもらえたときのように先のことは考えず、「とりあえず楽しそうだからショーをやってみよう」という展開が、今の日本では起こりそうにないのは淋しい気もしています。

そういう意味で僕のように小規模でもものをつくっているクリエイターにとって、SNS やインターネットの影響力は、本当に才能のある人に国籍問わずスポットライトが当たるという意味でとても貴重です。ただ、さっき話したようにバズることを重視する風潮はもはや緩和状態になっています。その点でも今は過度期と言えますし、SNS とある程度距離をうまく取りながら利用できる人が、チャンスをつかんでいくのかもしれないですね。



小泉智貴 ドレスデザイナー / 美術作家

TOMO KOIZUMI / Dress designer / Studio artist

published_2024.07.31 / photo_ yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

いろんなアートに触れられるのが六本木の魅力。

出身は千葉ですが、東京の美術館には中学生の頃から通っていました。高校1年のときに森美術館で観た『COLORS ファッションと色彩展』は、特に印象に残っています。独学だったので、オートクチュールの洋服を間近で見られる機会はなかなかなかったですし、美術館でファッションをテーマにした展示に出会えたのも初めての経験でした。ファッションの芸術的価値が認められていることを実感できてうれしかったのを覚えています。

ピラミデの存在ももちろん知っていましたが、通うようになったのは最近で、美術作家として活動を始めていろんなギャラリーにリサーチに行くようになってからです。これほどアクセスのよい立地で、興味深い作品を観ることができるのはとても魅力的ですね。森美術館や国立新美術館のような大きな美術館の周辺に、小さな商業ギャラリーがいくつも点在している。そのバランスが好きですし、いろんなアートに触れられるのが六本木の魅力だと思います。



ピラミデ

中庭にあるガラスのピラミッドが目印の複合施設。現代アート、写真、古美術などのギャラリーが多数集まっている。本拠地をフランスに置く『ペロタン』、現代アートシーンのさらなる交流と進展を育む企画展スペース『SCAI PIRAMIDE』、日本・中国・韓国など東洋の古美術を専門に扱う『ロンドンギャラリー』など、現代アート、写真、古美術などのギャラリーが多数集まっている。

カテゴライズされない中間の脆さは、クリエイションでカバーする。

僕が扱っているのはいつも布であり、ラッフルであり、カラフルなものですが、そこから生まれる作品は多面的で、ファッションとも、アートとも捉えられる。また、お店に売っているわけでもないし、常に展示しているわけでもないの、皆さんに見てもらえる機会が限られています。なので、六本木という街を舞台に、ファッションとアートの境界を超えた作品を一同に展示する機会があったらいいなとすごく思いますね。マネキンにドレスを着せるだけでもいいですが、空間を使ってなにかしてみたい。例えばドレスを2、3着展示するだけではなくて、360度を使ったインスタレーションのような、圧倒される空間ができれば面白そうですね。それこそファッションに興味がある人も、アートに興味がある人にも喜んでもらえるようなものになりたいです。

どんな場合も、カテゴリーの中間に存在するものは、カテゴライズされていない分どうしても脆くなりがちです。けれど新しいものをつくることは、カテゴリー自体をつくっていくことでもあるので、その弱さはクリエイションの力で補強していきたい。別に名前なんて付かなくても、見た目やもの自体に面白さがあれば十分だと思うので、そこは自信を持って打ち出していきたいです。

撮影場所：ピラミデ

取材を終えて……

“事実は小説より奇なり”を地で行くようなキャリアの持ち主ですが、運だけではない「なるべくしてなった」と思わせるこだわりを、小泉さんの言葉の端々から感じることができました。例えば、ものづくりに対する強い憧れと情熱、アイデアを形にする力、信念を曲げない強固な意志、自分の力を信じ続けること、など。現在、これまでの経験や考えをまとめたエッセイを執筆中とのこと。唯一無二の道を切り拓く小泉さんが今後どんな世界を見せてくれるのか、楽しみです。(text_ikuko hyodo)